

令和三年度徳島文理高等学校入学試験問題

第一限 国語 (その一)

注意

解答欄は問題用紙の(その八)(その九)にあります。

解答に字数制限のある場合、句読点なども文字数に数えます。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

劇作家の寺山修司^{*}は、野球を通じて民主の思想を身につけた、と書いている。寺山の論は、キャッチボール——特に投手と捕手の間のそれ——が、相互の信頼を基礎にするコミュニケーション(会話)だという洞察^aに基づいている。これを受けて、私たちはさらに付け加えるべきだろう。打撃は、このコミュニケーションを妨害しているように見えて、実は投手の球に応答することであり、「対決」の姿勢をも包摂^bしたさらに高次のコミュニケーションなのだ、と。

この点を理解しておけば、寺山が書いてから半世紀以上後を生きる現在の私たちは、今度は、三月末に引退したイチローの野球を通じて、現代的な民主主義や開かれた社会はどうあるべきかを学ぶことができる。

イチローの驚異的な技術は、打撃^cということへの根本的な態度の変更をもとにしている。これがどういことかは、イチローの素振りからわかる。イチローは、打つ時とは異なるフォーム、ゴルフのスイングのようなフォームで素振りをする。

テレビ番組でその理由を問われたとき、イチローは次のように解説している。打者は、スイング時に、自分の胸を(早く)投手に正対させると負けである。このときグリップがかなり前方に来ているため、その後のバットの可動域が小さくなる。予想外の球種やコースに対応するには、打者はグリップをできるだけ遅くまで後ろに保ち、広い可動域(より多くの可能性)を残しておかなくてはならない。「胸を投手に見せないように」という意識を確認するために、あの素振りをするのだ、とイチローは語る。

ここで驚くべきは、イチローが、スイングを始めてしまった後でさえも、バットのキドゥ^cを修正して、想定外の球に対応しようとしていることである。リリースされた球がホームプレート上に来るまで0・5秒に満たない。だからほとんどの打者は、投球前に球種やコースを予想し、それだけを打とうとしている。また自分がヒットにできる(ストライクゾーンより少し小さい)ゾーンを知っていて、その中に入る球に狙いを定めている。こうした想定から外れた球に対しては、普通は見逃すか、空振りしたり打ち損じたりするほかない。

しかしイチローは違う。イチローの打撃をスローモーションの映像で見ると、彼の方針に技術的な裏付けがあることがわかる。スイングの途中で、バットのコースやタイミングを微修正し、安打にすることがあるのだ。

悪球を打たなければ、イチローの成績(打率や出塁率)はもつと高かったはず、と指摘されることがある。だが、予期せぬ球でもヒットにしようとするのがイチローの流儀だ。彼は、あらかじめ具体的に特定された球種やコースに狙いを限定せず、基本的にはどんな球がやって来ても——ときにボール球でも——それを迎え打とうとしたのだ。

さて、ここにどんな社会的・政治的な教訓があるのか。先に、野球の打撃は、投球という他者に応答することであり、高次のコミュニケーションだと述べた。□、イチローの打撃は、想定を超えるどんな他者にも応じ、彼らを歓迎しようという態度の表現である。

社会の多様性が大事だとか、異質な他者にカンヨウ^dで開かれた社会がよい、ということとは、今日、誰もが言う。しかしそういうとき暗黙のうちに——ときにはメジテキ^eに——、われわれにとって役立ち、かつ行儀のよい他者だけが想定されている(例えば外国人労働者)。あるいは「異質」といつても、無害で、独特の文化や習俗で私たちが美的に楽しませてくれる程度の他者が思い描かれている(例えば多文化主義)。他者へのこうした態度は、明確に予期していた球だけを打つ打者のやり方と同じだ。

令和三年度徳島文理高等学校入学試験問題

第一限 国語 (その二)

だが真に開かれた社会とは、予期や想定範囲を超えた何かをなしうる他者をも受け入れ、歓待する社会だ。そういう他者との間には葛藤もあるはずだが、にもかかわらず、「一つの世界」の中で彼らと共存し協力すること。そんなものは理想主義的なユートピアだ、と思うかもしれない。

しかしイチローは、不可能に見える奇跡の技術でも現実になることを証明した。^⑤この事実が、ユートピアを可能な現実と捉え直す勇気を私たちに与える。

(大沢真幸「イチロー元選手の打撃技術」『徳島新聞』平成三十一年四月二十九日掲載)

注*寺山修司……歌人・劇作家。

*イチロー……元プロ野球選手。日本人初のメジャーリーガー外野手。平成三十一年三月現役引退。

問一 傍線部 a～e のカタカナを漢字に直し、漢字は読みを書きなさい。

- a 洞察 b 包摂 c キドウ d カンヨウ e メイジテキ

問二 傍線部①「これ」とあるが、「これ」とはどのようなことを指すのか、四十字以内で説明しなさい。

問三 傍線部②「私たちはさらに付け加えるべきだろう。」とあるが、どのようなことを新たに付け加えるというのか、六十文字以内で説明しなさい。

問四 傍線部③「打撃ということへの根本的な態度の変更」とあるが、それを具体的に述べている一文を抜き出し、最初の五字で示しなさい。

問五 傍線部④「ほとんどの打者は……その中に入る球に狙いを定めている。」とあるが、「その中に入る球」とは、どのようなものの比喩であったのか、本文中から、二カ所をそれぞれ二十字以上三十五字以内で抜き出して答えなさい。

問六 文中の空欄に入れる語として最も適当な語を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア だが イ かつ ウ 一方 エ あるいは オ とすれば

問七 傍線部⑤「この事実が、ユートピアを可能な現実と捉え直す勇気を私たちに与える。」とあるが、筆者はどのような社会を求めているのか、四十字以内で説明しなさい。

令和三年度徳島文理高等学校入学試験問題

第一限 国語 (その三)

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

大通りを曲がり、仕舞屋しまたやが軒を連ねる筋に入ると、陽の沈むのを待ちあぐねた子供たちが、道にうづくまってもう花火に火をつけている。酒臭いはつぴ姿の男が、同じ柄のはつぴを着た幼な子を肩に乗せて、ぶらりぶらりと神社に向かっている。そのあとを喜一と並んで歩きながら、にわかには大きくうねりだした祭り囃子に耳を傾けていると、信雄はなにやら急に心細くなってきた。

「僕、お金もって遊びに行くのん、初めてや」

ときどき立ち停まると、喜一はそのたびに掌を開いて、晋平しんぺいからもらった硬貨の数を確かめた。信雄は自分の金をそっくり喜一の掌に移した。

「僕のと合わしたら、何でも買えるで」

「そやなあ、あれ買えるかも知れへんなあ」

信雄も喜一も、火薬を詰めて飛ばすロケットのおもちやが欲しかったのである。恵比須神社の縁日えびすでも売っていたから、きっと今夜も売っているはずであった。

天満宮のような巨大な祭りではなかったが、それでも商店街のはずれから境内への道まで露店がひしめきあっている。人通りも多くなり、スルメを焼く匂いと、露店の蕨蔭くさざの上で白い光を発しているカーバイドの悪臭あくじゅうが、暗くなり始めた道にたちこめて、信雄も喜一もだんだん祭り気分にかかれていった。

喜一は硬貨をポケットにしまい、信雄の手を握った。

「はぐれたらあかんで」

人混みを縫いながら、二人は露店を一軒一軒見て歩いた。

水飴屋みずあめの前に立ったとき、

「一杯だけ買って、半分ずつ飲めへんか？」

と喜一が誘った。ロケットを買ってからにしようという信雄の言葉でしぶしぶその場を離れたが、こんどは焼きイカ屋の前でも同じことをせびった。飲み物や食べ物を売る店の前に来ると、喜一は必ず信雄の肘を引っぱってサソさそうのだった。

「きつちゃん、ロケット欲しいことないんか？」

喜一の手を振りほどくと、信雄は怒ったように言った。

「ロケットも欲しいけど、僕、いろんなもん食べてみたいわ」

口をとがらせて、喜一は脛の虫さされのあとを強く掻きむしった。

いつのまにか空はすっかり暗くなり、商店街に吊るされたちょうちんにも裸電球にも灯が入って、急激に増してきた人の群れがその下で押し合いへし合いしている。

すねたふりをして一步も動こうとしない喜一を尻目に、信雄はひとり境内に向かって歩きだした。歩き始めると、人波に押されて立ち停まることもできなくなってしまった。喜一の顔が遠ざかり見えなくなった。

信雄は慌てて引き返そうとした。色とりどりの浴衣や団扇うちわや、汗や化粧の匂いが、大きな流れとなって信雄を押し返す。やっとの思いで元の場所に戻って来たが、喜一の姿はなかった。

令和三年度徳島文理高等学校入学試験問題

第一限 国語 (その四)

信雄はびよんぴよん跳びあがってまわりを見渡した。いつのまにすれちがったのか、人波にもまれていた喜一の顔が、神社の入り口のところで見え隠れしていた。

「きつちゃん、きつちゃん」

信雄の声は、子供たちの喚声や祭り囃子に消されてしまった。喜一は小走りで先へ先へと進んでいく。相当狼狽して信雄を捜しているふうであった。

信雄はおとなたちの膝元をかきわけ、必死で走った。何人かの足を踏み、ときどき怒声を浴びて突き飛ばされたりした。境内の手前にある風鈴屋の前でやっと喜一に追いついた。赤や青の短冊が一斉に震え始め、それと一緒に、何やら胸の底に突き立ってくるような冷たい風鈴の音に包み込まれた。

信雄は喜一の肩を掴んだ。喜一は泣いていた。泣きながら何かわめいた。

「えっ、なに？どないしたん？」

よく聞きとれなかったので、信雄は喜一の口元に耳を寄せた。

「お金、あらへん。お金、落とした」

風鈴屋の屋台からこぼれ散る夥しい短冊の影が、喜一の歪んだ顔に映っていた。

信雄と喜一はもう一度商店街の端まで行き、地面を睨みながら歩いた。再び風鈴屋の前に戻って来たが、落とした硬貨は一枚もみつからなかった。喜一のズボンのポケットは、両方とも穴があいていた。

信雄が何を話しかけても、喜一は黙りこくったままだった。人波に乗って二人は境内に流されていった。

一台のだんじりが置かれ、その中で数人の男がお囃子を奏でていた。同じ旋律の執拗な繰り返しに酩酊した男たちは、裸の体から粘りつくような汗を絞り出している。数珠繋ぎに吊された裸電球が、だんじりのまわりで震えていた。

信雄は石段に腰をおろし、ちょうど目の前に佇んで誰かを待っているらしい浴衣姿の少女を見つめた。その少女の持つ廻り灯籠の中で、黒い屋形舟が廻っている。

鈍い破裂音が聞こえ、それと一緒に煙硝の匂いがたちこめた。信雄と喜一の前にプラスチック製の小さなロケットが落ちてきた。境内の奥に、とりわけ子供たちの集まっている露店があり、おもちゃのロケットが莫産に並べられていた。

喜一が足下のロケットをすばやく拾いあげ、信雄の手を引いてその露店のところまで走った。

はちまき姿の男は莫産に座ったまま喜一の手からロケットを受け取り、

「サンキュー、サンキュー、ご苦労さん」

と潰れた声で言った。

信雄と喜一は顔を見合せて笑った。

「C」

「たったの八十両、どや、安いやろ」

二人はまた顔を見合わせた。二つも買ったうえに、焼きイカが食べられたではないか。

「さあ、もういっぺんやって見せたるさかい、買うていけよ！」

危ないぞオ、月まで飛んで行くロケットじゃあと叫びながら、男は短い導火線に火をつけた。信雄も喜一も慌てて二、三步とびのくと、固唾を呑んで導火線を見つめた。

令和三年度徳島文理高等学校入学試験問題

第一限 国語 (その五)

大きな破裂音とともに、ロケットは斜めに飛び上がり、銀杏の木に当たって賽銭箱の中に落ちた。慌てて追いかけていく男の姿が、見物人の笑いをかった。信雄も笑った。笑いながら喜一の顔を見た。なぜかあらぬほうに視線を注いでいる喜一の目が、細くすぼんでいた。

「ちえっ、あんなどこに落ちてしまたら、もう取られへんがな」

走り戻って来て、男は莫座の上にあぐらをかき、八つ当たりぎみに怒鳴った。

「こら、[＊]甲斐性なし！こんなおもちゃの一つや二つ、よう買わんのんかい。ひやかしだけのやつはどこぞに行きさらせ」

「D」

喜一が信雄の肩をつつき、足早にだんじりの横をすり抜けて行った。

「早よ行こ、早よ行こ」

喜一は笑って叫んだ。人の波はさらに増して、神社の入口で渦を巻いている。

人混みを避けて路地の奥に駈け入ると、喜一は服をたくしあげた。おもちゃのロケットがズボンと体のあいだに挟み込まれていた。

「E」

「おっさんがロケット拾いに行きよったとき、盗ったんや。これのぶちゃんにやるわ」

信雄は驚いて喜一の傍から離れた。

「盗ったん？」

得意そうに頷いている喜一に向かって、信雄は思わず叫んだ。

「そんなんいらん。そんなことするのん、泥棒や」

信雄の顔を、喜一は不思議そうに覗き込んだ。

「F」

「G」

口汚なく怒鳴っていた[＊]香具師から、まんまとロケットを盗んできたことは、信雄にも少し痛快なことであった。だが彼は心とはまったく裏腹な言葉で喜一をなじっていた。喜一の手からロケットを奪い、足元に投げつけた。そして小走りで人混みの中にわけいっていった。喜一はロケットを拾い、追いつがって来て、また言った。

「ほんまにいらんのん？」

自分でもはっとするほど烈しい言葉が、信雄の口をついて出た。

「泥棒、泥棒、泥棒」

人波をかきわけかきわけ、信雄はむきになって歩いた。喜一の悲痛な声がうしろで聞こえた。

「ごめんな、ごめんな。もう盗んだりせえへん。のぶちゃん、僕、もうこれから絶対物盗ったりせえへん。そやから、そんなこと言わんとつてな。もうそんなこと、言わんとつてな」

振り払っても振り払っても、喜一は泣きながら信雄にまわりついて離れなかった。二人は纏れ合いながら、少しずつ祭りの賑わいから離れて行った。

夜はかなり更けていた。

令和三年度徳島文理高等学校入学試験問題

第一限 国語 (その六)

人通りもまばらになった堂島川のほとりでは、柳の枝だけが川風にそよいでいる。二人はとぼとぼ河畔を帰って行った。風の加減で、祭り囃子の音がわかには大きく聞こえたりすると、二人は申し合わせたように立ち停^とまって、無言で互いの顔を窺^{うかが}い合った。

やっと湊橋^{なむら}に辿^{たど}り着いたとき、東の夜空に花火があがった。初めに幾つかのタイリン^eが咲いて、もうそれっきりかと思つたところ、こんどは赤や青のしだれ柳が、ひゅうひゅうと音をたてて散っていった。

⑤ 信雄も喜一も湊橋の欄干に馬乗りになって、いつまでも花火を見つめた。川風がこちよかつた。満潮はその盛りを終え、膨らんだ川面^{かわも}が目に見えぬ速度でしぼんでいた。

(宮本輝 『螢川・泥の河』より)

注*仕舞屋……商店が並んでいるところで、商売をしないで暮らしている家。

*晋平……信雄の父。

*露店……盛り場や縁日などの道ばたに、莫蔭などを敷いたり、台を組み立てたりしただけで物を売ったり食べさせたりする簡単な店。

*カーバイド……炭化カルシウム(カルシウムカーバイド)を使用したランプ。

*莫蔭……い草の茎などで編んだ敷物。

*酩酊……ひどく酒に酔うこと。

*甲斐性なし……気力がなく頼りになりそうもないこと。

*香具師……縁日などに、道ばたや境内で見世物をしたり商品などを売ったりする人。

問一 波線部 a～e のカタカナを漢字に直し、漢字は読みを書きなさい。

- a 縁日 b サソ(う) c 団扇 d 囃子 e タイリン

問二 この文章に描かれている季節は春・夏・秋・冬のいつですか。また、何の場面か、三字以内で答えなさい。

問三 文中の空欄 A・B に入れるのに最も適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- ア びりびり イ ぶらぶら ウ おどおど エ じぐじぐに オ とぼとぼ カ にやにや

令和三年度徳島文理高等学校入学試験問題

第一限 国語 (その七)

問四 文中の空欄「 C 」 「 G 」に入れるのに最も適当なものを次から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア のぶちゃん、帰ろ

イ いらん

ウ それ、なんぼ？

エ それ、どないしたん？

オ いらんのん？

カ いるわ

問五 傍線部①「二つも買えたうえに、焼きイカが食べられたではないか」とあるが、この上に仮定の表現をつけるとわかりやすくなる。それを十五字以内で答えなさい。

問六 傍線部②「あらぬほう」、④「裏腹な」の意味を簡潔に答えなさい。

問七 傍線部③「喜一は笑って」とあるが、その「笑い」はどのような気持ちによるものか、本文中の叙述を用いて四十字以内で答えなさい。

問八 傍線部⑤「信雄も喜一も湊橋の欄干に馬乗りになって、いつまでも花火を見つめた。川風がこちよかった。満潮はその盛りを終え、膨らんだ川面が目に見えぬ速度でしぼんでいた。」とあるが、その時の心情はどのようなものと考えられるか。次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア もらったお金を落としてしまって、せっかくの祭りなのに楽しむことができなかったことを残念に思う心情。

イ 二人並んでこちよい風に当たりながらも、最初から花火を見ていた方がよかったと残念に思っている心情。

ウ 二人とも相手に対する不満は残るものの、時間の経つにつれて仕方ないこととして出来事を受け入れる心情。

エ 二人は、予期せぬことでぎくしゃくしていたが、今は花火の美しさに引き込まれ、落ちついてきている心情。

オ 口汚く怒鳴っていた香具師への怒りが、水面に響く花火の音を耳にしながら再びふつふつとわきあがる心情。

